

中原遺跡

発掘調査概報

1 9 8 2

掛川市教育委員会

序

掛川市においても経済、社会の変貌がすすむなかで、圃場整備、茶園改植が各所で行なわれております。

こうしたなかで和田岡地区に所在する3基の前方後円墳のうち吉岡原台地の中程に位置する大塚古墳の周辺もその対象となり発掘調査をすることになりました。

大塚古墳については過去の調査の結果、帆立貝型の前方後円墳で、県内でも数少ない貴重なものであることが判明しております。

この度の調査では、前方部裾部、周濠、周提帯の規模確認ならびにその下部にある縄文時代の集石遺構などを発掘し、多くの成果を得ました。

調査にあたり、ご指導をいただいた静岡県教育委員会文化課および調査員ならびに関係者各位に対し深く感謝申しあげるとともに、本書が埋蔵文化財に対する理解と学術研究の資料として活用いただければ誠に幸いです。

昭和57年3月

掛川市教育長 佐藤正夫

例 言

1. 本書は昭和57年1月10日から同年3月31日までに実施された、静岡県掛川市高田字中原1018に所在する中原遺跡の発掘調査概報である。
2. 調査は、昭和56年度遺跡緊急発掘調査として国および静岡県の補助金を得て、掛川市教育委員会が主体となって実施したものである。
3. 調査は、県文化財審議委員斎藤忠博士、同長田実氏の指導を得て掛川市教育委員会の岩井克允、静岡県教育委員会文化課の平野吾郎が担当して実施した。また調査には、渡辺康弘、松本一男、鈴木節司の三君の応援を得た。
尚、菊川町在住の加藤賢二氏には種々の教示、助言をいただいた。
4. 本書の執筆は調査参加者が分担した。
 - 1 岩井克允
 - 2.3.4 (A地区の遺構). 5 (石器). ... 渡辺康弘
 - 2.4 (B地区の遺構). 5 (土器). 松本一男
 - 6 平野吾郎
5. 実測図・写真類の整理は松本が、図版・挿図の作製は松本・渡辺があたった。
6. 本書の編集は平野・渡辺があたり、全体の統一を平野が行った。
7. 本調査および本書刊行に関する事務は掛川市教育委員会社会教育課（課長青木定男、課長補佐増田徹禪、文化係長後藤正明）があたった。

中原遺跡

目次

序

例言

1. 調査に至る経過と調査の目的	1
2. 調査の方法と経過	1
3. 遺跡の環境と層序	5
4. 遺構の概要	5
A地区の遺構	5
B地区の遺構	7
5. 遺物の概要	10
土器	10
石器	16
6. まとめ	17

挿図目次

第1図 位置図	2
第2図 周辺環境図	3
第3図 調査区配置図	4
第4図 遺構全体図	6
第5図 吉岡大塚古墳周濠土層堆積図	6
第6図 SP 01実測図	7
第7図 1号集石実測図	8
第8図 1号埋甕実測図	9
第9図 土器出土状態実測図	10
第10図 土器実測図(1) (1号埋甕)	11
第11図 土器実測図(2)	12
第12図 土器拓影図	13
第13図 石器実測図	15

図版目次

図版Ⅰ 周辺地形
図版Ⅱ A地区完掘状態・1号集石
図版Ⅲ B地区完掘状態・SP 01完掘状態
図版Ⅳ 1号埋甕検出状態・B地区土器出土状態
図版Ⅴ 1号埋甕・縄文中期前半の土器(1)
図版Ⅵ 縄文中期前半の土器(2)・石器

中原遺跡

1. 調査に至る経過と調査の目的

掛川市教育委員会では昭和53年から原野谷川右岸の段丘上に所在する和田岡古墳群の保存を目的とした測量調査を実施してきた。瓢塚古墳（昭和53年度調査）、吉岡大塚古墳（昭和54年度調査）と各和金塚古墳（昭和55年度調査）の一連の測量調査は、五世紀前半期に比定される前方後円墳を核とする当地域の古墳時代社会の解明に大きく寄与するものである。

中原遺跡をめぐっては菊川町在住の加藤賢二氏が精力的な踏査によって資料を蓄積され、本遺跡が当地方でも数少ない縄文時代中期中葉の資料を提供していること、また遺物散布範囲も広いことから注目をひく遺跡であった。市教育委員会と県教育委員会は特に吉岡大塚古墳の保存対策との関わりから当遺跡を含めて周辺地域の茶畑改植のチェックを強化してきた。ところが、昭和56年秋、遺跡の1部で改植が実施されたとの加藤氏からの連絡を受けた当局は、改植予定区域にあわせすでに改植のための天地返しが行われた地区についても発掘調査を実施して残存する遺跡の内容を把握した上で、周辺地域に対しても十全なる保存対策を構ずることにした。

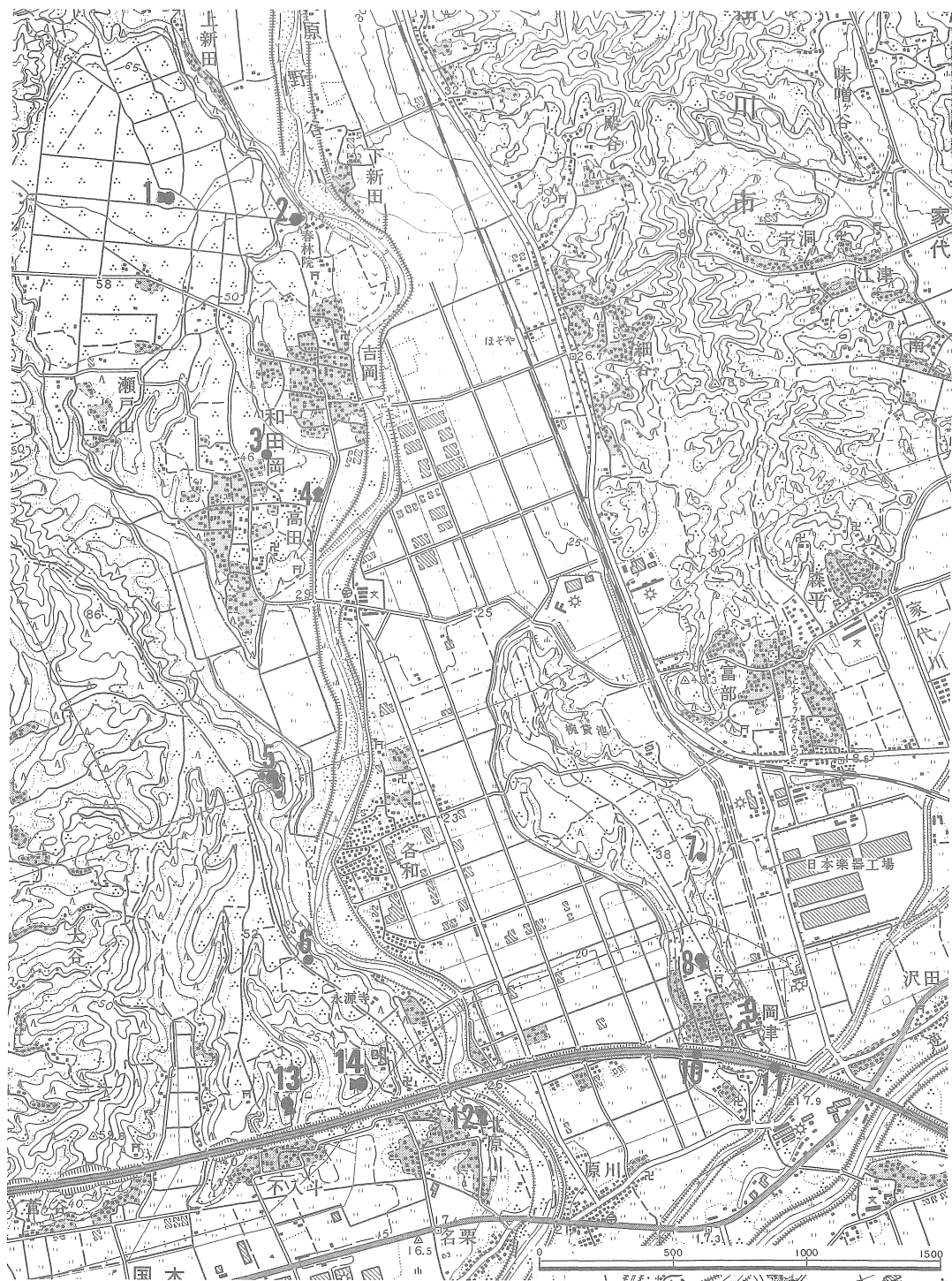
昭和57年1月10日から同年3月31日の延べ80日間にわたった調査は、地山面に残された重く冷たい重機の爪に憤りを繰返しながらも、吉岡大塚古墳の前方部側周濠の底面規模を把むことができ、縄文時代中期中葉の遺構と遺物の検出ができたことは収穫であった。

2. 調査の方法と経過

今回の調査では、中原遺跡を便宜的にA、B地区に分けて発掘調査を実施した。A地区はグリッド主軸を吉岡大塚古墳に合致させ、墳丘実測図との整合性を考慮した。B地区では、主軸を今回改植がなされた茶畑の北辺方向に設定した。

昭和57年1月10日から発掘調査にはいったが、まず包含層と遺構の残存を確かめるためA地区に5条のトレンチを、B地区には発掘区の周囲と南北中央方向にトレンチをそれぞれ設定し観察を行なった。その結果A、B両地区共V層上面まで天地返しが行われていることが判明し、特にB地区西半では全く包含層が存在していないことがわかった。A地区ではトレンチでの土層観察の結果、濠底のわずかな残存が認められ、その覆土である黒色土層を追跡することで周濠の規模は把握できるものと判断し、北半部について全面発掘を実施することにした。3月19日重機にて攪乱土を排土した。同月20日排土を終了し、地山面は改植のバックフォーで大きく破壊されていたが、かろうじて部分的に残存していた黒色土を手掛りに濠底幅を復元することができた。吉岡大塚古墳前方部墳丘上のBM-3から主軸上10m西にグリッドセンターを設定し、4m×4mの網をかけ同月30日に平面実測を終了、また周濠土層堆積図を併せて作製し、31日発掘状態の写真撮影を行ないA地区の調査を終了した。

B地区の調査は、昭和57年2月15日に調査区の杭打ちから始めた。本地区は、茶畑の改植に



第1図 位置図

- | | | |
|----------------|-----------|-------------|
| 1. 中原遺跡・吉岡大塚古墳 | 5. 各和金塚古墳 | 9. 岡津横穴群 |
| 2. 春林院古墳 | 6. 永源寺古墳 | 10. 西岡津古墳 |
| 3. 行人塚 | 7. 神明塚古墳 | 11. 向山古墳群 |
| 4. 瓢塚古墳 | 8. 奥ノ原古墳 | 12. 宇佐八幡1号墳 |



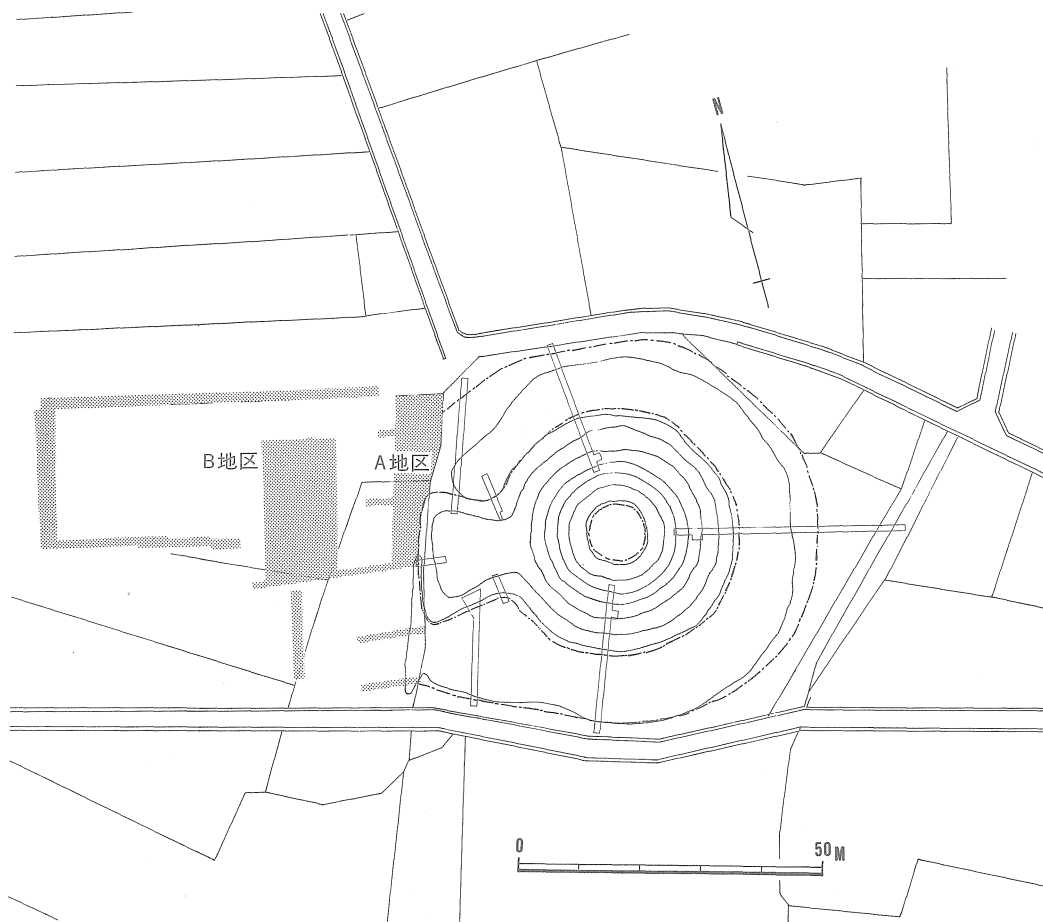
第2図 周辺環境図

より調査区の半分以上を地山層（V層）まで重機による攪乱を受けていた。そこで本調査では、その攪乱深度を観察することにより遺物包含層の確認、自然地形面の把握及び遺物包含層の残存する地区の発掘調査を主体にすることとした。以上を目的として調査を開始し、同年3月31日をもって本調査の現地作業を終了した。以下簡単に調査の経過を述べることにする。

調査期間の前半（2月15日～3月7日）は、調査区の西側の攪乱された区域に、第1列、第0・N列、第7列各々に幅150cmのトレンチを入れ土層観察を行なった。これにより、旧地形がG・H区あたりを最頂部として東西に緩やかに傾斜していることがわかった。同時に遺物包含層が、第IV層（暗褐色土層）であることが明確となった。尚、第1列トレンチにおいて埋甕を検出する

に至り、これにより本遺跡が本調査区より北側に広がっていることが予想されることとなった。

調査期間の後半（3月8日～3月31日）は、前半の調査結果をもとに、遺物包含層残存区の調査を行なった。本地区の調査でも、調査期間の関係上止むを得ず一部地点において、重機導入を行なった。しかし重機による掘り下げは、原則としてⅢ層（黒色土層）中に止めた。この間、発掘区中央において縄文時代中期の土拵2基、集石1基及び時期不明の溝を検出するに至り、それらは全て平面実測・断面実測の作図を行ない写真撮映による記録を行なった。そして、同月30日発掘区の全体図の作成、31日全体写真の撮映を行ないB地区の調査を終了した。



第3図 調査区配置図

3. 遺跡の環境と層序

本遺跡は吉岡大塚古墳の西に隣接し、縄文時代を主体とする広大な遺跡である。

原野谷川の浸食と隆起によって形成された河岸段丘はゆるやかに東へ傾斜し、この段丘上には茶畑の深耕や改植によって地表に現われた縄文時代、弥生時代、古墳時代の遺物が広く散布している。しかし本遺跡からは弥生土器と土師器の出土は皆無であったが、厳密な意味での遺跡の範囲とその存続時期の確定は今後の大きな課題である。

東に隣接する吉岡大塚古墳は、昭和54年に掛川市教育委員会の主催で測量調査が実施され、主軸を東西にとり西面する帆立貝式前方後円墳であることが判明している。全長55.0m、後円部径41.3mを測るが、それまでに削平されていた前方部側の周濠は図らずも今回の調査(A地区)でその規模をつかむことができた。

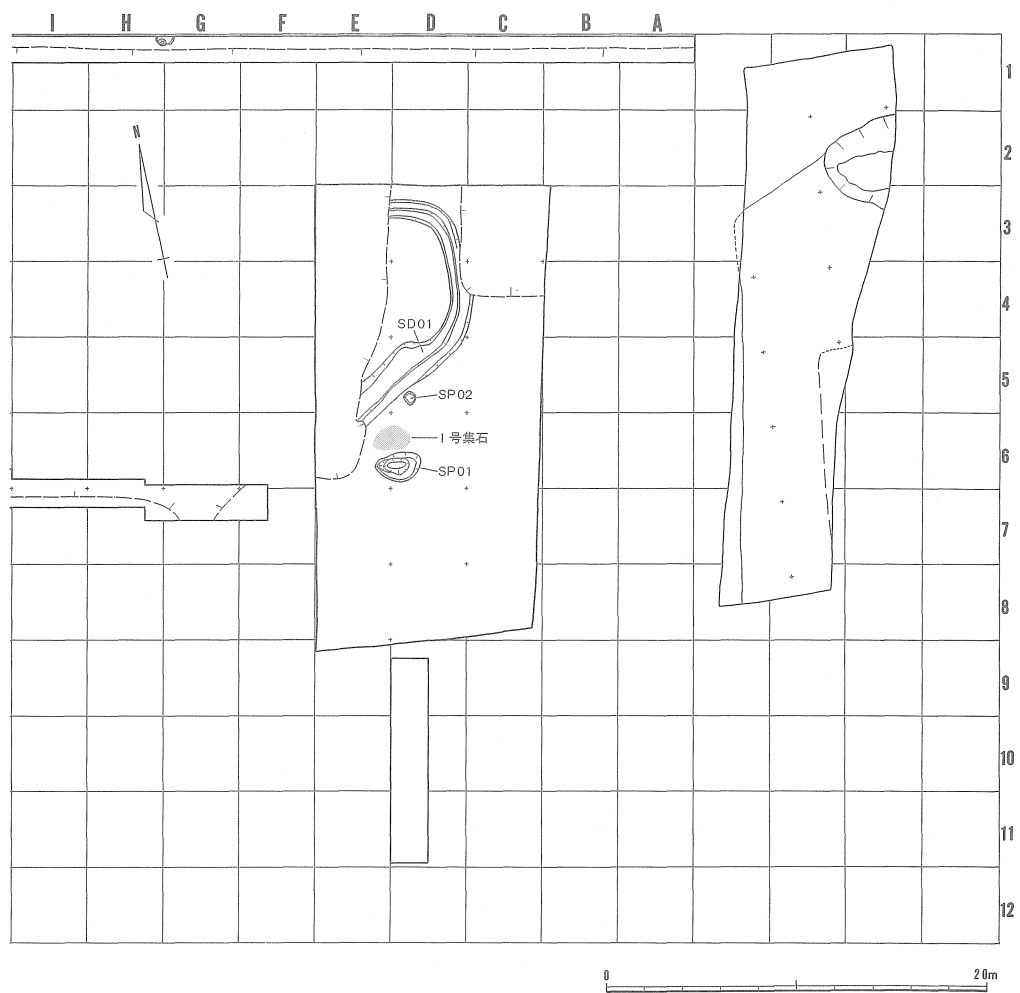
本遺跡から東へ500mの段丘縁辺にある春林院古墳は昭和41年に静岡大学を中心とした調査団によって調査され径30mの円墳であることが判明している。この古墳を北端として南方に行人塚古墳(円墳径27m・昭和56年測量調査)、瓢塚古墳(前方後円墳全長63m・昭和53年測量調査)と各和金塚古墳(前方後円墳全長66.4m・昭和55年調査)等で構成する和田岡古墳群が同じ段丘上に展開している。また対岸の台地上には神明塚古墳、奥ノ原古塚、岡津横穴群、西岡津古墳、向山古墳、宇佐八幡1号墳等が密集し、当地区は県内でも有数の古墳密集地帯をつくっている。

今回の調査では、層序を4層に分層して理解した。Ⅰ層とⅡ層は共に耕作土であり、地表からおよそ25cmまで耕作が及んでいることが判明した。Ⅲ層は黒色土層であり、この層は無遺物層である。厚さ約10cmを測る。Ⅳ層は暗褐色(栗色)土層であり、縄文時代の遺物包含層である。厚さ約10cmを測る。Ⅴ層はローム質の明褐色土層であり、この層の上面が遺構検出面である。しかし、茶の樹根がこの層まで及んでおり、遺構検出には困難が伴った。またB地区では比較的砂質の土壌を形成していたが、この層を掘さくしてA地区の吉岡大塚古墳の濠底には拳大の礫の露頭がみられ、段丘形成層の複雑な様相を示している。

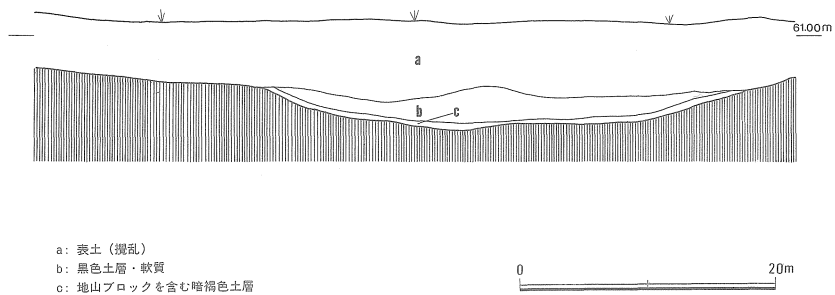
4. 遺構の概要

A地区の遺構 A地区での改植による天地返しは予想以上に深く地山まで及んでおり、トレンチの観察では吉岡大塚古墳周濠の立ち上りを把むことは不可能であった。そこでA地区と呼称した前方部周濠の北半を全面発掘した結果、それでも僅かに残存する黒色土(周濠埋土)を認めることができ周濠の形状と規模について大略理解することができた。

周濠の形状は梶国男氏の分類に従えば「F型：前すばみアーチ型(蕃上山古墳)」(『前方後円墳の濠形変化』「小田原考古学研究会会報第9号」小田原考古学研究会 1980)に相当すると言えよう。またその幅は濠底幅を比べてみると後円部側が6.5mであるのに対し前方部側では4.2mとその幅を大きく減じている。さらに深さについても後円部側では海拔59.5m付近を濠底とするが、前方部側では海拔60.5m付近となり比高差約1mを測る。以上のように前方部側の周濠は規模が小さくなることが確かめられた。また今回A地区の北端で検出できた周濠の端部は、前回の



第4図 遺構全体図



- a: 表土 (規乱)
- b: 黒色土層・軟質
- c: 地山ブロックを含む暗褐色土層

第5図 吉岡大塚古墳周濠土層堆積図

調査で示された墳丘図の60.50 m、60.25 mの等高線が周濠内で南東に最深部を形成していることから、前方部の周濠から区別される一段低い周濠の起点を物語っているものと言えよう。このように前方部から後円部に向けて周濠が深くなる例として、先の大阪府古市古墳群に所在する蕃上山古墳を掲げることができる。(『外環状線内遺跡調査概要・1』大阪府教育委員会 1973)しかし、吉岡大塚古墳が蕃上山古墳のような「階段状」の周濠を有するかどうかは目下のところ不明である。

今回の調査では前方部南半に連続するプランを確認した。しかし第5図に示したように先の後円部周濠端部からそのまま前方部墳丘が立ち上がるかどうかは、既に旧耕作時に削平されており不明としなければならないが、墳長が55.0 mであることは確かめられた。

また吉岡大塚古墳が後円部径41.3 m、蕃上山古墳が全長53 m、後円部径40 mの規模を有し、濠形やこの形状を含めて相互の類似点を指摘できる。今後吉岡大塚古墳の規格を考える上で蕃上山古墳は重要な指標となろう。

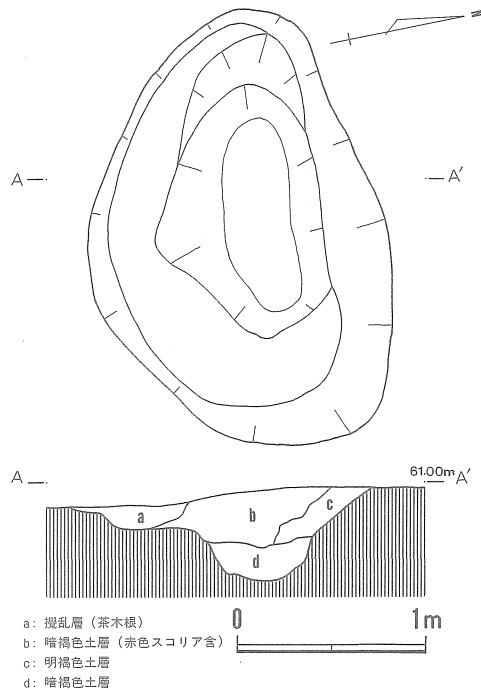
B地区の遺構 本地点において検出した遺構は、縄文時代の土拵2基、埋甕1基、集石1基及び構築年代・性格不明の溝1基である。以下その詳細について述べていく。

SP 01 (第6図)

検出位置はD・E-6区。平面形は長楕円形を呈す。規模は長径235 cm、短径160 cm、深さ約50 cmでテラス状の平坦面をもつ。長軸方向をN-88°-Wとするものである。覆土は、a 黒色土層(茶木根による攪乱層)、b 暗褐色土層(赤色スコリア含有、V層粒子散在)、c 明褐色土層(IV層とV層が溶混)、d 暗褐色土層(基本をbとするが粘性・しまりの度が増す)である。本土拵の構築時期は、覆土中の遺物から縄文時代中期勝坂Ⅱ式期と思われる。

SP 02

位置はD-5区。平面形は不整形円形を呈す。規模は長径70 cm、短径56 cm、深さ(残存深度)13 cmを計り長軸方向はN-11°-Wである。覆土は暗褐色土層(スコリア含有)の単一層である。構築時期は、覆土中の遺物から縄文時代中期初頭五領ヶ台式終末期の頃と思われる。



第6図 SP 01実測図

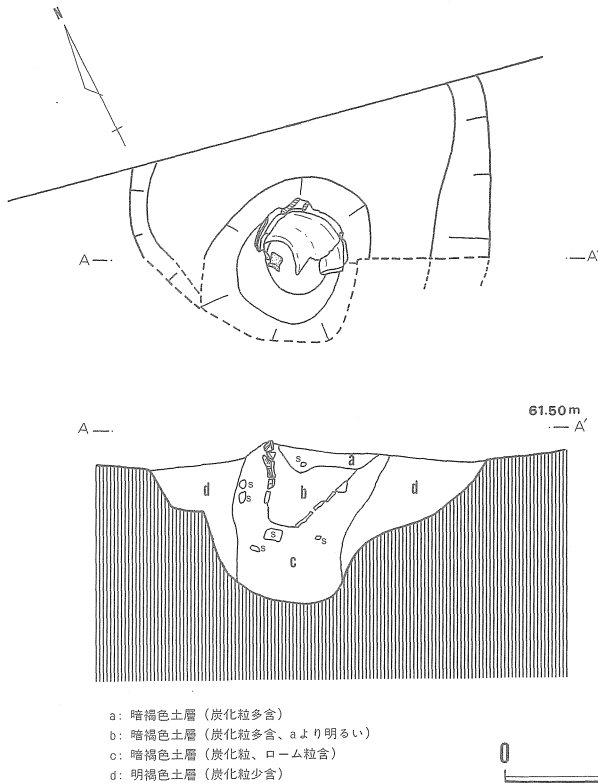


第7図 1号集石実測図

1号集石 (第7図)

検出位置はD・E-6区でSP 01の直ぐ北側に位置する。礫分布範囲は長径180cm、短径120cm程である。第7図のエレベーション図からわかるように集石下部に浅い凹地面を検出している。しかし、調査掘り下げ時における遺構確認及び集石断面の土層観察により本集石は、掘り込みをもたない集石であると判断した。集石構成礫の特徴は、礫総数192個(砂岩143個、チャート他49個)で、これらは全て近隣で採集可能な河原石である。また構成礫のうち完形礫が132個(68.8%)、破損礫は60個(31.2%)であり、破損礫は全て軽破損である。さらに礫の赤化率、スス・

※



第8図 1号埋室実測図

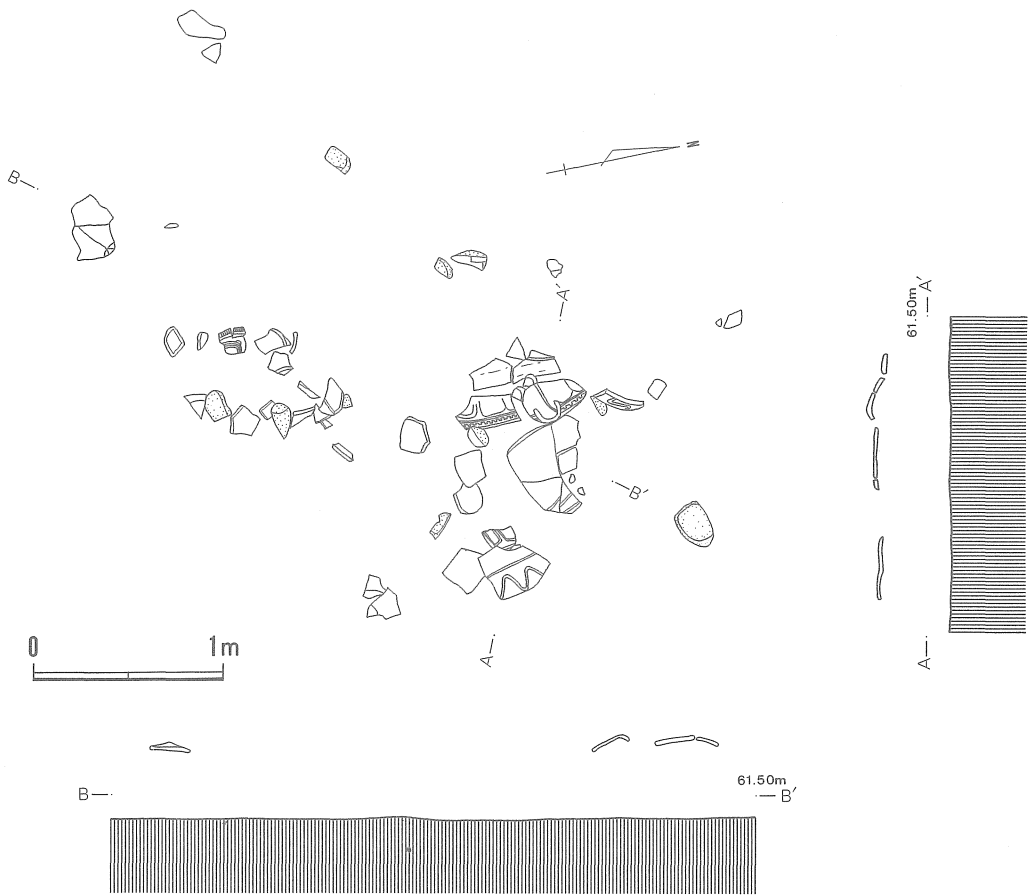
タール状附着率は、1%未満であった。尚伴出遺物は石錘1個、打斧2個で、集石構築時期は縄文時代中期五領ヶ台式終末期と思われる。

1号埋室 (第8図)

検出位置はG・H-1区。平面形及び規模は、本遺構の北側が調査区域外で未調査の為詳細は不明である。覆土は、a暗褐色土層(炭化粒多含)、b暗褐色土層(炭化粒多含、aより明るさを増す)、c暗褐色土層(炭化粒、V層粒子含有)、d明褐色土層(炭化粒少含でV層の溶混を窺る)、尚埋設土器内の覆土は前出のa、bである。構築時期は、埋設土器により縄文時代中期勝坂Ⅱ式期と思われる。

SD 01 (第4図)

位置はD-3~5、E-5・6区にて検出。発掘西側を大きく攪乱されている為に全貌を把握することができなかった。また出土遺物も得られなかったことから、時期・性格共に不明である。



第9図 土器出土状態実測図

(註)

軽破損：礫の破損面が1面あるいは2面あるものを指す。礫の破損状況は、集石の使用頻度に関わることで、集石の性格把握の為の一つの視点を与えるものと考えられる。

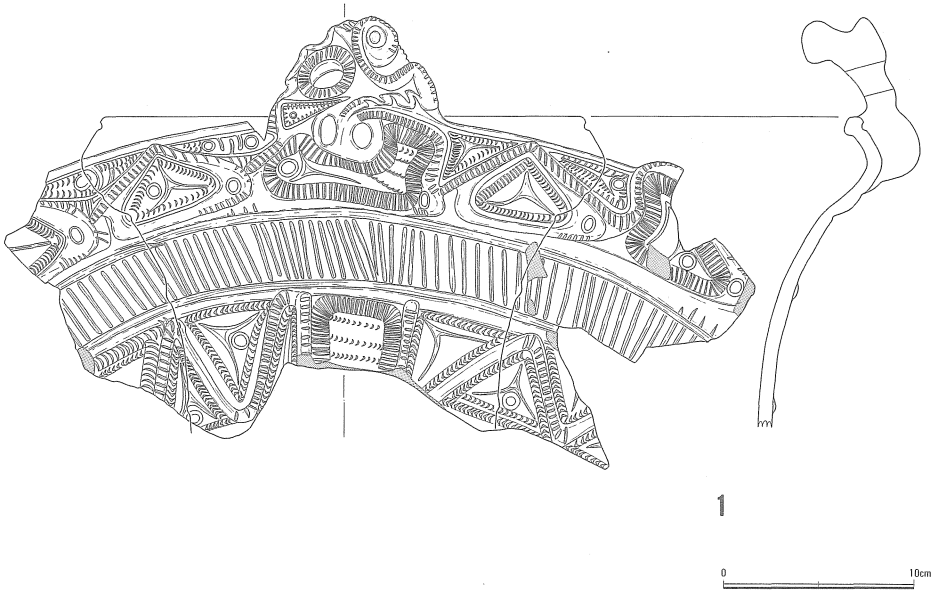
5 遺物の概要

土器 出土総点数は1,800余点で、これら縄文時代中期の土器は第IV層（暗褐色土層）を中心に出土した。出土土器の大半は破片であるが、当地方該時期にはめずらしく器形全体を把握する好資料が1号埋竈埋設土器（第10図1）として検出した。

本報告書において報告する資料は、頁数の関係上少数ではあるが、本遺跡の時間的性格を十分に表現できうるものと考えられる。

I 群土器

縄文時代中期初頭五領ヶ台式に比定されるもので、本地区から出土したものは全て新しい様相



第10図 土器実測図(1)(1号埋甕)

を示すものである。

A類(第11図5)

復元すると口径46cmの大形土器となる。胎土には金雲母・石英粒・長石粒が多く含まれる。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。

口縁部は逆U字状の貼付け隆帯による小突起をもち、竹管状工具による交互刺突で表出される鋸歯状文が観られる。そして同工具によって沈線が施され、Y字状に頸部に垂下していく。

B₁類(第12図7~11)

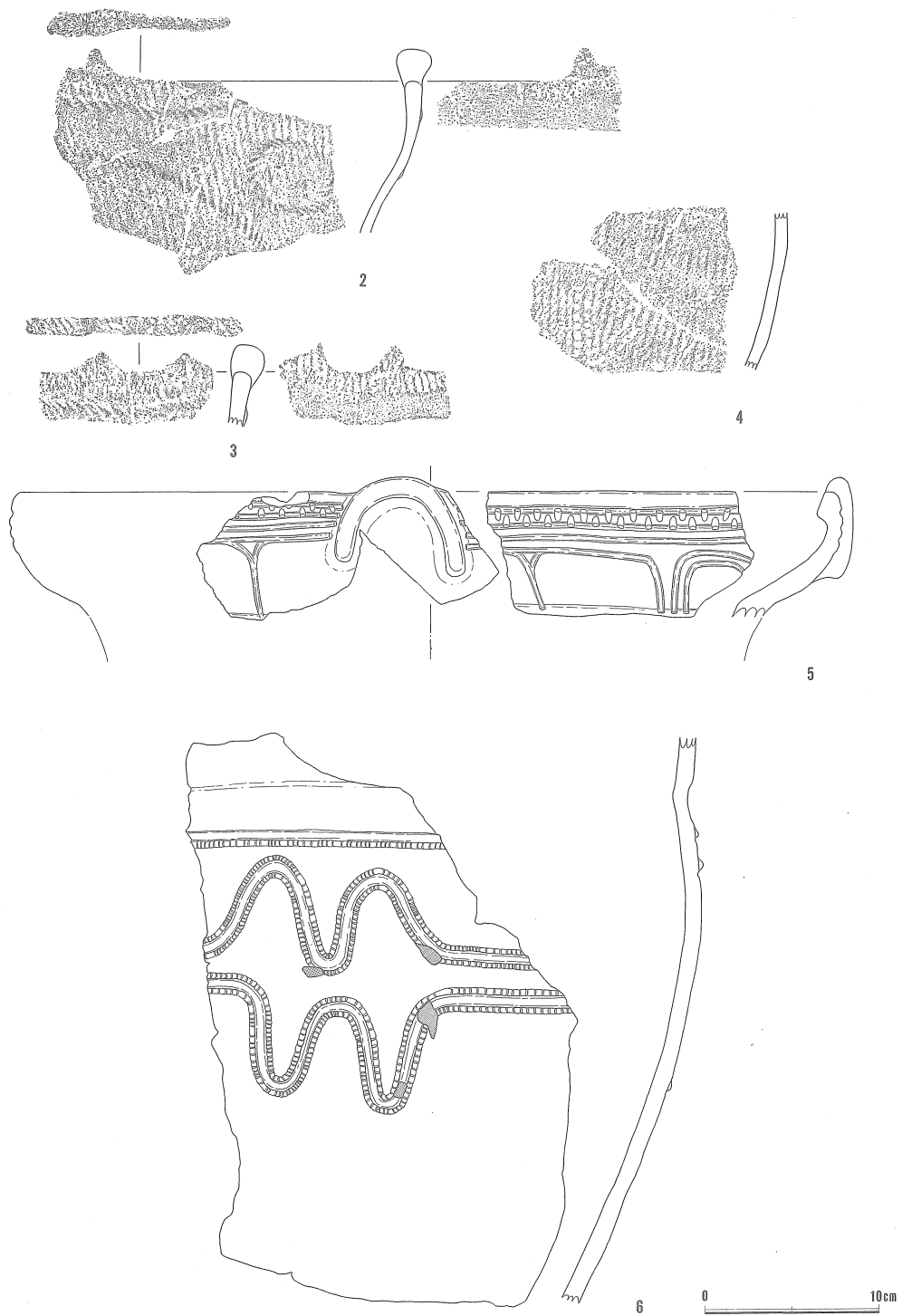
口縁部に2・3条の爪形文が施される土器

7~9は同一個体で、R・Lの縄文地文に三角形印刻文が、または半截竹管状工具による平行沈線文が施される。10にも三角形印刻文が施されており、11の爪形文の間には半截竹管状工具による押引文が施されている。

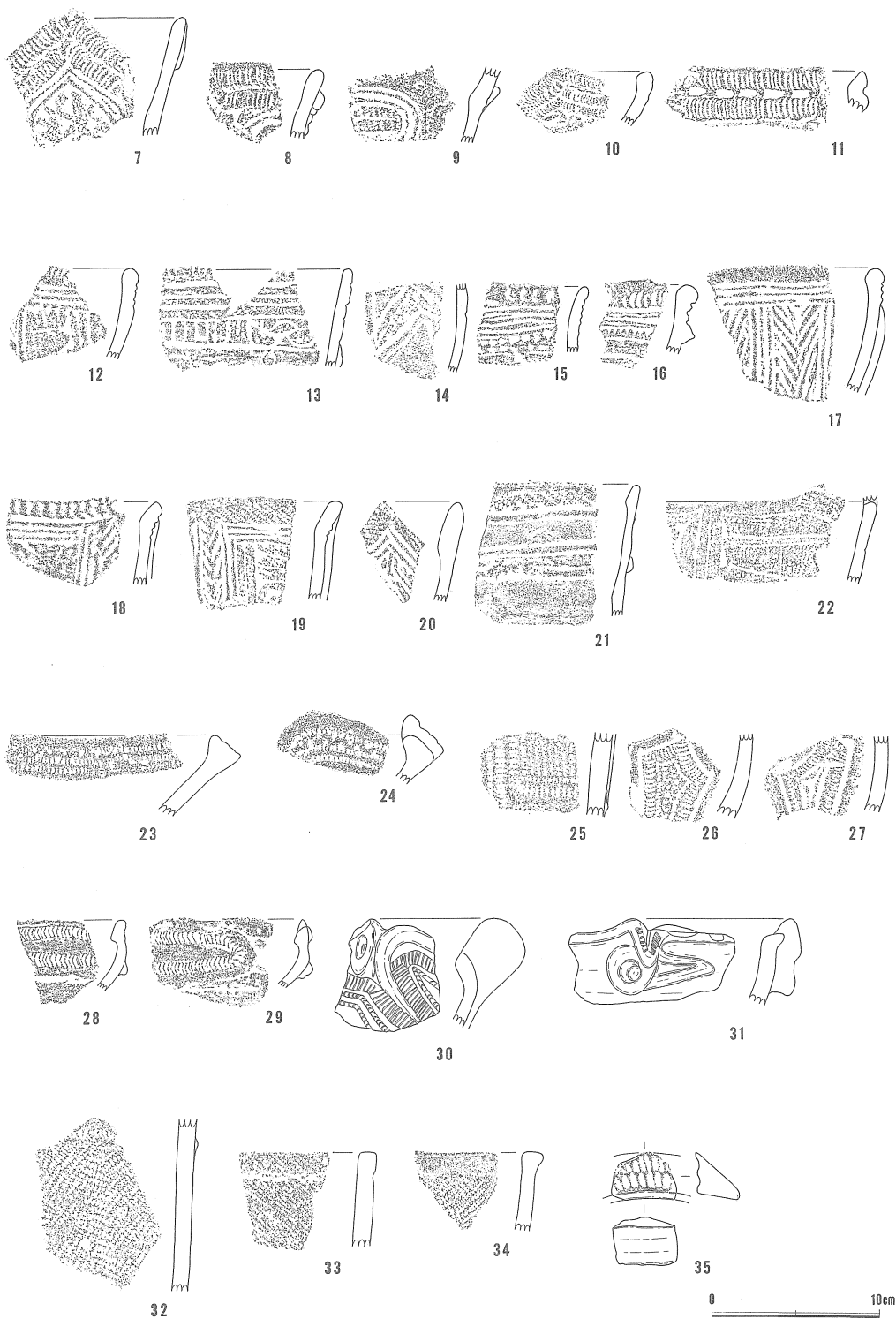
B₂類(第12図12~18)

口縁部に1条の爪形文が施される土器。

12~14は、縄文地文に半截竹管状工具及びヘラ状工具によって沈線文が施されている。15は、半截竹管状工具による平行沈線文と同一の原体と思われる工具の外周面(外皮面)使用による押引き文が施されている。16は、ヘラ状工具による平行沈線文と、同一原体と思われる工具により刺突文が施されている。17・18は、半截竹管状工具による平行沈線文の集合をみる。



第11图 土器实测图(2)



第12图 土器拓影图

C₁ 類 (第12図19~21)

口縁部に縄文原体 R・L が地文として施文されているものである。

19・20には三角形印刻文が、21にはヘラ状工具により刻みが施文されている。

C₂ 類

地文の原体にはクシ状工具による刺突文が観られ、その器面にはヘラ状工具による沈線文及び三角形印刻文が施文されている。

Ⅱ 群土器 (第11図6)

関東地方に観られる縄文時代中期阿玉台式の要素を示すものである。貼付けの微隆帯に沿って1条の角押文が施される。胎土には、石英粒・長石粒・金雲母が多量に含まれており、堅くよくしまりがあり、焼成も良い。また明瞭ではないが、胴部下半に脂圧痕状の凸凹が観られる。色調は暗赤褐色を呈している。

Ⅲ 群土器 (第11図2~4)

縄文時代中期船元Ⅱ式に比定される土器。荒い撚糸文が器面全体に施文され、平坦な貼付隆帯によりモチーフが画かれている。この貼付隆帯上にも撚糸文が施されている。尚、口唇部及び口縁部裏面にも撚糸文が施されている。4には、二列の連続刺突文が施されている。

Ⅳ 群土器

縄文時代中期中葉勝坂Ⅱ式に比定される土器群。

A 類 (第10図1)

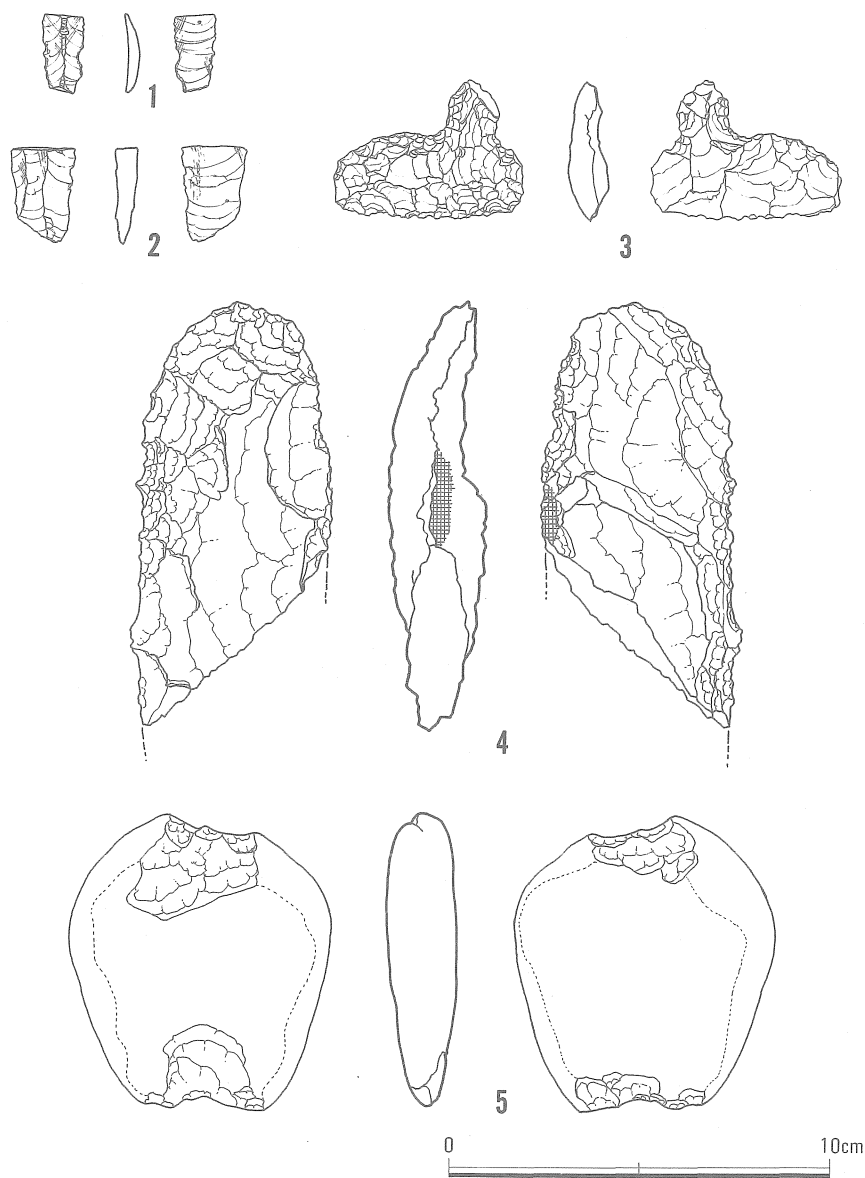
これは、1号埋甕として埋設されていた土器で1つの大きな把手をもつ。口縁部は内側に内湾し胴部がくびれ、底部がソロバン玉状に張り出す器形になると思われる。口径は24cm程である。

口縁部文様帯は三角形プラス逆三角形の区画文が配され(把手においてモチーフが乱れる)、区画隆帯上には刻目、隆帯縁取りには、半截竹管状工具による爪形文及びヘラ状工具によるキャタピラ文が施されている。また各区画内には三叉文が配される。

頸部には、半截竹管状工具による平行竹管文の表出がなされており、竹管文により縁取りがなされている。

胴部文様帯では、把手の下部位で四角形の区画文、左右に三角形プラス逆三角形の横位区画文帯が展開する。隆帯上には刻目が施され、隆帯の縁取りとして三角押文、ヘラ状工具によるキャタピラ文が観られる。区画文内には、三叉文及び半截竹管状工具外皮面使用による爪形状の刺突が観られる。

胎土には、石英粒・砂粒が含まれ、焼成は良好であるが器面全体がザラザラしているのが特徴的である。尚、土器色調は赤褐色を呈している。



第13図 石器実測図

B類 (第12図23~25)

角押文を多用する土器を集めた。

23・24は、同一個体で浅鉢と思われる。25には、角押文の他幅5mm程のへら状工具によるキャタピラ文が施されている。

C類 (第12図26~30)

区画内をキャタピラ文で縁取りするもの。

26は、半截竹管状工具による刺突と三角押文が観られる。27には、三叉文が施される。28・29は同一個体で、貼付隆帯が楕円区画を形成する。30は、角押文がキャタピラ文に沿って1条乃至は2条走行する。

D類（第12図引）

貼付隆帯上に刻目を施す。

E類（第12図32～34）

地文に縄文を施すもの。

32は、L・Rの原体を横位回転し施文後、部分的に同原体を縦位回転させる。貼付隆帯に沿って1条の三角押文が走行する。33・34は、R・L原体を横位回転で施文。33はさらに無節の波状沈線を見る。

V群土器（第12図35）

D字状の半截竹管状工具による爪形文が観られる。部位は橋状把手の一部と思われる。

以上が、本地区において出土した土器の概略である。I・II・IIIの各群はいずれも縄文時代中期初頭終末段階に属するものであるが、これらの土器群のうち（第11図5）と（第11図6）及び（第11図2～4）の土器は、第9図に示したように遺構外出土ではあるものの平面的・出土層（レベル）において共伴出土の状況を示している。このことを最後に付け加えておく。

石器 今回の調査では1号集石から打製石斧2点、石錘1点が、また遺構外から打製石斧2点、石錘1点、石匙1点、凹石1点、細石刃3点、剥片1点が出土している。これらの一部を選んで第12図に示した。1と2は細石刃と考えられる黒曜石製の剥片で、それぞれ長さ2.1cm、巾1.1cmと長さ2.5cm、巾1.7cmを測り、共に中央部に稜を有してしかも広端部を切断している。3は横型の石匙で連続した剥離によって片面に刃部を造り出している。石材はサマカイトに似た安山岩で裏面に節理面を観察する。刃部長5.0cmを測る。4は短冊型打製石斧の基部破片で、ほぼ中央から刃部にかけて欠損する。また片側刃部に装着痕と思われる叩打痕を観察する。残存長は11.4cm、巾5.2cmで厚さ2.6cmを測る。石材は玄武岩であると推定したが、他の一例も同じ石材であり、共に1号集石に伴って出土したものである。5は砂岩製の石錘であり、長径7.7cm、短径6.8cm、厚さ1.9cmを測り、これも1号集石中より出土した。長軸両端を両面からの叩打によって加工している。

本石器群は、細石刃を除いて土器出土レベルからの出土をみており、前節で触れたように土器がほぼ同一時期の一括資料であることから、五領ヶ台式期の石器組成の一部であると判断してよいであろう。しかし調査区が遺跡の周辺部であるためか、質量共に貧弱でこの時期の石器組成を十分に示しているとは言い難い。一方、細石刃の存在は本遺跡が旧石器時代にまで遡る可能性を示している。不幸にして確実な出土層位を確かめることは出来なかったが、加藤賢二氏の教示によれば、遺跡周辺で有舌尖頭器を採集しておられるとのことであり、今後の調査には旧石器の包含層検出の問題を含めてより慎重なる対応が望まれるところである。

6. ま と め

掛川市の西側に広がる和田岡原は早くから開墾され、現在全面に茶園が広がっており、原の谷川流域の水田地域と合せ、豊かな農村の景観を形づくっている。

茶園は敷草が畑全面に敷かれており、遺物の表面採集が困難であり、遺跡その位置および範囲等の把握は従来必ずしも充分におこなわれているとは言い得なかった。

しかし最近茶樹の老齢化・品種改良のための抜根・改植が盛んにおこなわれるようになり、数多くの遺跡が発見されてきている。中原遺跡もそうした遺跡の一つであり、改植時に加藤賢二氏を始め地元の人々による精力的な分布調査により発見され、その範囲、年代等が明らかになってきた。

昭和56年度に吉岡大塚古墳の前方部周濠にあたる位置で茶園の改植がおこなわれることが明らかになり、そこが中原遺跡の一部に含まれていることが考えられるため、発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、先年来実施している和田岡古墳群測量調査の一環として、県文化財審議委員斎藤忠博士、同長田実氏の指導と、県教育委員会文化課の協力を得て、掛川市教育委員会の岩井克允氏が中心になり渡辺康弘、松本一男両君の参加を得て実施した。

発掘調査の概要は既に述べたとおりであるが、再度整理すれば、以下のとおりである。

1. 吉岡大塚古墳の前方部周濠を確認することができた。この結果周濠は前方部のすばまるアーチ形とも称すべき形態を程することが理解できた。
2. 前方部の周濠は他の部分に比較し浅く、巾も4.2 mと狭くなっている。この結果前方部基底巾は23 m程に復元できたが、周濠の一部に不明確な部分があり、今後検討の余地を残している。
3. 中原遺跡では縄文時代中期中葉前の五領ケ台式新型式と船元Ⅱ式の共伴が確かめられ、また勝坂Ⅱ式の埋甕並びに土器片が出土した。従来資料が貧弱であった当地方において良好な資料を提供できたと言えることができる。
4. 遺構は比較的乏しく、集石遺構1基とさらに新しい時期の土壇（SP 01）1基を検出したのみである。これは調査区が茶の樹抜根等によりかなり荒れていることにもよるが、遺跡の末端部分にあたることに主たる理由があろう。
5. 従来知られている中原遺跡の中心は今回の調査区の北側に広がっており、遺物の散布範囲は径200 m程の範囲を示している。今回の調査でも調査区はその末端部分であることを理解でき、従来知られている範囲がほぼ正しいことが理解できた。





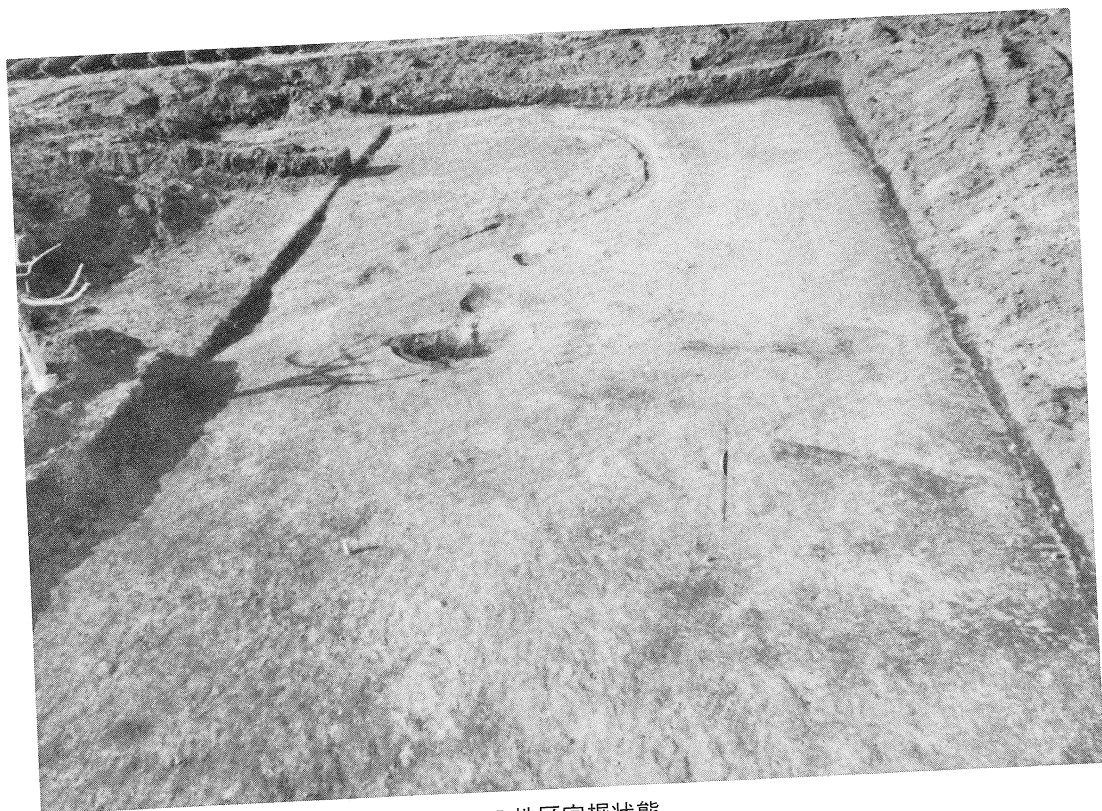


A 地区壳掘状态



1号集石



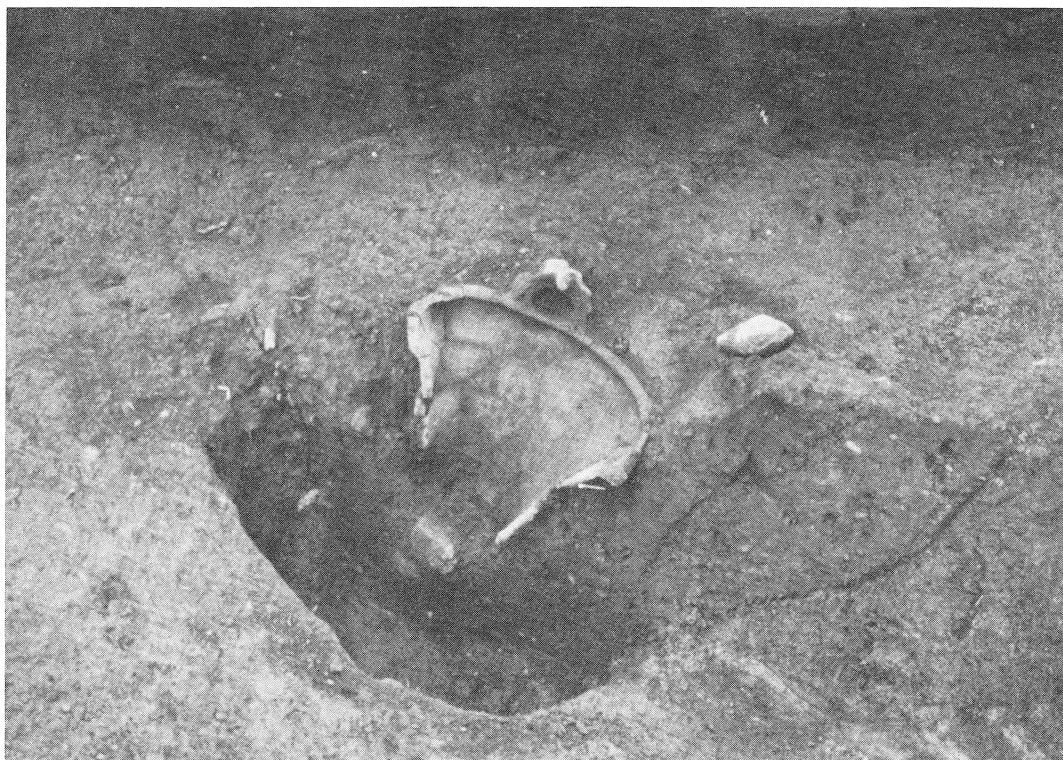


B地区完掘状態

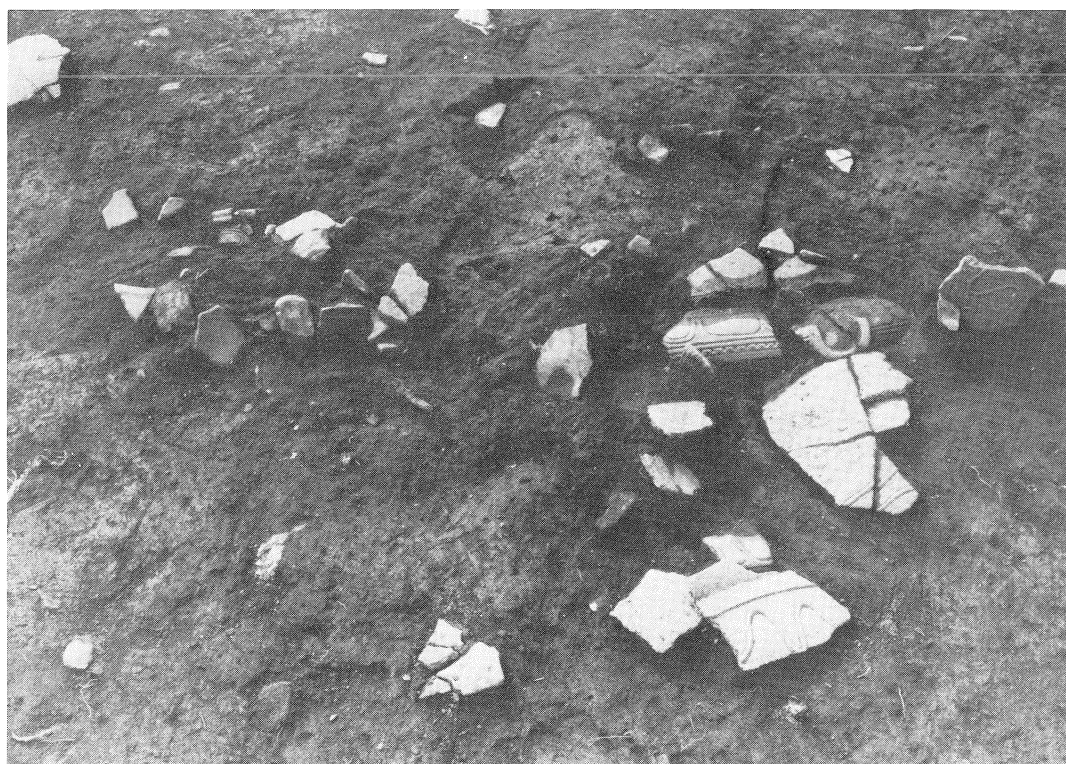


SP01 完掘状態





I号埋甕検出状態



B地区土器出土状態



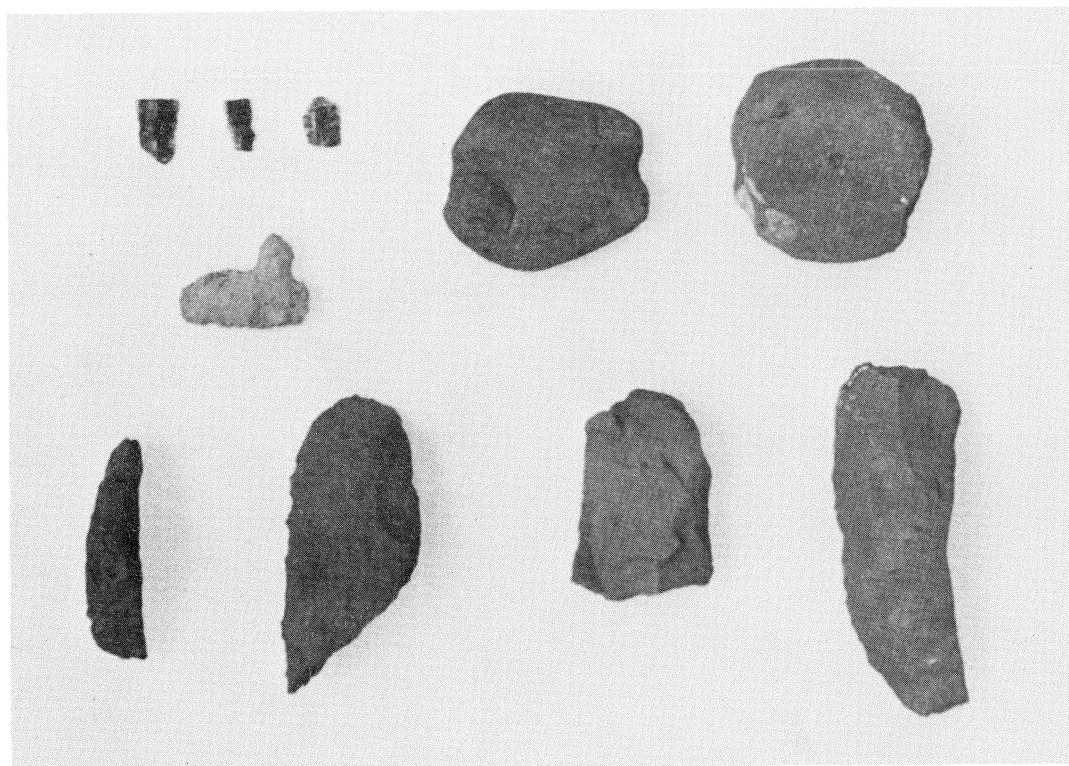
1号埋甕



縄文中期前半の土器(1)



縄文中期前半の土器(2)



石器



中原遺跡
発掘調査概報

昭和57年3月31日

編集 掛川市教育委員会
発行 掛川市教育委員会
印刷 静岡市豊田3丁目5番30号
株式会社 三 創
TEL 0542-82-4031

